



年間第 24 主日 (ルカ 15:1-32)

イエスの導きのもとにまことの命がある

木曜日と金曜日にかけて、九州全域から集まった視覚障害者に情報を提供する施設の大会に参加してきました。今年は九州全域から 490 人の参加がありました。この大会は正式には九州視覚障害者情報提供施設大会と言いますが、今年は長崎県が主催になっていましたので、長崎県内で視覚障害者に情報を提供している 2 つの施設、すなわち長崎県視覚障害者情報センターと、わたしが代表を務める声の奉仕会マリア文庫が今回の大会の主催者となって 2 日間の大会を切り盛りしてきました。

ただ、主催した 2 つの施設と言っても、声の奉仕会マリア文庫と長崎県の施設である視覚障害者情報センターとは活動の規模も組織の大きさも比較になりませんので、わたしたちは長崎県視覚障害者情報センターにおんぶに抱っここの状態でお手伝いをさせていただいたという状況です。具体的には、閉会式の部分を引き受けさせていただいて、わたしも主管施設の代表として終わりの挨拶をさせていただきました。

大会期間中の講演会と研修会の内容はここでは省略しますが、毎年この大会のために苦心して先生を選んできて、参加者が実りある研修を受けられるように配慮してくださるのには本当に頭の下がる思いです。今回の研修を受けて、視覚障害者への声による情報提供と点字での情報提供に、さらに心を込めて務めることができるようになると思います。

さて今週の福音朗読はルカ福音書の第 15 章です。第 15 章と言っただけで「あー」と気づく方は相当聖書に親しんでおられる方です。3 つのたとえがありまして、「『見失った羊』のたとえ」、「『無くした銀貨』のたとえ」、「『放蕩息子』のたとえ」の 3 つです。皆さんの手元にある「聖書と典礼」にはそのうちの「『見失った羊』のたとえ」と「『無くした銀貨』のたとえ」が掲載されていますから、いちおうこのうちの 1 つのたとえに絞って、話をまとめたいと思います。

「『見失った羊』のたとえ」の中で、百匹の羊のうち一匹を見失ったとあります。聞いた話では羊は方向音痴の動物のようで、羊飼いに導かれなければすぐに迷子になってしまうのだそうです。何らかの事情で一匹の羊が迷子になったのでしょう。羊が迷子になると、それはそのまま「死」に直結してしまいます。羊飼いの導きのもとにあることで、羊の命は守られています。羊が、安心して生き続けるためには、羊飼いの目の届く所にいる必要があるのです。

しかし、羊がいったん迷子になると、羊のほうから羊飼いのいる所に戻って来ることは不可能です。ですから、羊飼いは「九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで」(15・4) 探し回ることになるのです。

羊飼いのそばに置いて、安心して生き続けられる状態にしてあげることは、羊飼いの務めです。イエスはこの羊飼いの使命を、ご自分の使命と重ね合わせて語っています。つまり、わたしたち人間と、救い主イ

イエス・キリストとの関係です。

わたしたち人間は、つねに命の与え主イエス・キリストの導きのもとにあって生きることができる存在です。自分で自分の命を守り、生き続けることができないうちが弱い存在なのです。どんなに人間が強がっても、眠っている間に心臓がほんの僅か止まっただけで明日は無くなってしまいますし、脳の血管が1cm詰まっただけで、これまでと同じ生活ができなくなるのです。自分ではどうすることもできないさまざまな危険を、神が見守ってくださっているのです、今を生きています。

イエスは、こんな弱い存在である人間を、いつもご自分の導きのもとに置きたいと願っているのです。それはわたしたちを支配するのではなく、わたしたちがのびのびと、本来の人間らしい活動ができる自由を守ってあげるために、導いてくださるのです。体のことだけではありません。罪によって、神の導きに背を向ける場合も、わたしたちは「死」に直面することになります。人間があらゆる意味で死なないために、イエスは「見失った一匹を見つけ出すまで」探し回ってくださるのです。

イエスが見つけ出そうとして探し回るのは、職務上の務めとして自衛隊や消防や警察が行方不明者を捜すのとは根本的な違いがあります。職務で捜索をしてくださる方々は、日没になれば捜索はいったん中断し、また明け方になってから再開します。イエスが見失った一匹を見つけ出そうと探し回るのは、命を賭けて、最終的には十字架上で命を投げ出して捜してくださるのです。それは見失った命が、ご自分の導きのもとにいないと知っておられるからです。

わたしたちの命は、イエスが命を賭けてご自分の導きのもとに置いていただいている命です。イエスが十字架の上に命を投げ出して、探し回ってくださったことで、イエスの導きのもとに置かれている命です。いったんイエスの導きからそれてしまうと、自力では戻って来ることができない弱い命です。

それなのに、いつしか自分を見失い、イエスの声の届かない場所に迷って、死の危険に身をさらすことがあります。こんな時わたしたちにできることは、悔い改めることだけです。聖書と典礼に掲載されていない「『放蕩息子』のたとえ」の中で、弟は悔い改めましたが、兄は悔い改めた弟を喜ぶことができませんでした。

人間は、自力では命の与え主であるイエス・キリストの元に戻ることができず、悔い改めることしかできないのですから、わたしたちはだれも、悔い改める罪人を非難してはいけません。事の大小はあるかも知れませんが、悔い改める罪人を喜んで迎える羊飼いのイエス・キリストの姿を、わたしたち教会家族も表していく必要があると思います。

わたしたちの毎日の生活の中に、神の導きのもとに在ることを感謝するきっかけを持ちたいと思います。生活の中で感謝できる人は、悔い改める人を喜ぶ人にもなれると思います。イエスの導きにすべての命が置かれるよう願いながら、このミサを続けてまいりましょう。